

# Asia Indicators

発表日: 2018年10月12日(金)

## 韓国、失業率は改善も内容に不透明感(Asia Weekly(10/5~10/12))

～シンガポール景気に底打ち感も、先行きには不透明要因が山積～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部  
 主席エコノミスト 西濱 徹(Tel: 03-5221-4522)

### ○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
10/5(金)	(台湾)9月消費者物価(前年比)	+1.72%	+1.82%	+1.54%
	(インド)金融政策委員会(レポ金利)	6.50%	6.75%	6.50%
	(現金準備率)	4.00%	4.00%	4.00%
10/8(月)	(台湾)9月輸出(前年比)	+2.6%	▲1.3%	+1.9%
	9月輸入(前年比)	+13.9%	+6.1%	+7.9%
10/10(水)	(フィリピン)8月輸出(前年比)	+3.1%	+1.1%	+0.3%
	8月輸入(前年比)	+11.0%	+14.3%	+31.6%
10/11(木)	(マレーシア)8月鉱工業生産(前年比)	+2.2%	+2.3%	+2.6%
10/12(金)	(シンガポール)7-9月期実質GDP(前年比/速報値)	+2.6%	+2.4%	+4.1%
	8月小売売上高(前年比)	▲0.4%	▲1.3%	▲2.7%
	(韓国)9月失業率(季調済)	4.0%	4.1%	4.2%
	(中国)9月輸出(前年比)	+14.5%	+8.2%	+9.8%
	9月輸入(前年比)	+14.3%	+15.3%	+19.9%

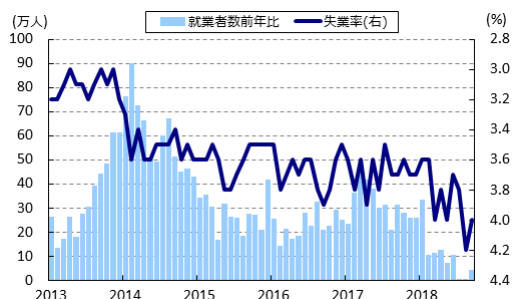
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

### [韓国]～幅広い世代で非正規雇用を中心に雇用拡大の動きの一方、20代の労働参加率は大きく低下～

12日に発表された9月の失業率(季調済)は4.0%となり、前月(4.2%)から0.2pt改善した。失業者数は前月比▲5.7万人と前月(同+11.2万人)から3ヶ月ぶりに減少に転じており、中期的な基調も拡大ペースが鈍化している。年代別では、60代以上の高齢層で増加傾向が強まる動きがみられる一方、過去数ヶ月に亘って拡大傾向が続いた10代及び20代の若年層で減少する動きがみられる。一方の雇用者数は前月比+9.1万人と前月(同▲1.2万人)から3ヶ月ぶりに拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向を強めている。年代別では、60代以上の高齢層を除くすべての年代で拡大しており、若年層のみならず働き盛り世代でも拡大の動きが出ている。なお、雇用形態別では正規雇用者以上に非正規雇用者で拡大の動きが顕著になるなど、足下の雇用拡大の動きは非正規雇用者を中心になっている様子が見え始める。また、労働力人口は前月比+0.3万人と前月(同+1.0万人)から2ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向を強めているものの、その中心は50代や60代以上といった高齢層であり、20代は減少するなど若年層による労働市場への参加の動きは力強さを欠いている。結果、労働参加率は63.1%と前月(63.1%)から横這いで推移しており、働き盛り世代や高齢層を中心に高止まりする動き

がみられる一方、20代については64.1%と前月（64.6%）から0.5pt低下するなど、若年層を巡る雇用・所得環境の厳しい状況は変わっていない。

図1 KR 雇用環境の推移



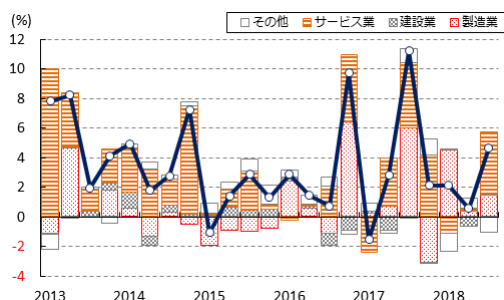
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [シンガポール]～サービス業や製造業を中心に生産が底入れしており、景気の底打ち感がうかがえる～

12日に発表された7-9月期の実質GDP成長率（速報値）は前年同期比+2.6%となり、前期（同+4.1%）から伸びが鈍化した。ただし、前期比年率ベースでは+4.7%と前期（同+1.2%）から伸びが加速しており、昨年末以降は頭打ちの様相をみせてきた流れに反転の兆候がうかがえる。概ねすべての分野で生産が拡大する動きがみられるなか、金融関連や小売・卸売関連を中心にサービス産業で生産が大幅に拡大したほか、電気機械関連やバイオ医薬品関連、輸送用機器関連を中心に製造業の生産も拡大傾向を強めている。また、前期において生産に大幅な下押し圧力が掛かった建設業の生産もプラスに転じたものの、その勢いは依然として乏しい展開が続いており、景気の足を引っ張る要因となっている。なお、先行きについては米中貿易摩擦の激化に伴う域内貿易の鈍化が懸念されるなか、その動きが景気の重石となる可能性は高いと見込まれる。

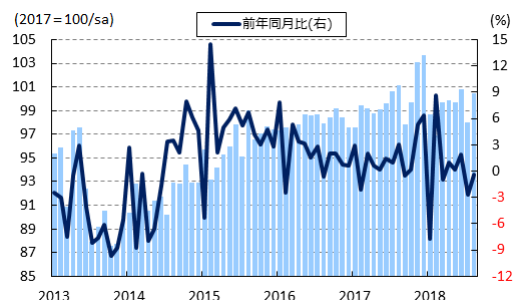
同日に発表された8月の小売売上高は前年同月比▲0.4%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月（同▲2.7%）からマイナス幅は縮小した。前月比も+2.55%と前月（同▲2.78%）から2ヶ月ぶりに拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向を維持するなど底堅く推移している。同国の小売売上高を巡っては、自動車販売が月ごとの変動が大きい上、小売売上全体の動向を左右する傾向があり、当月は前月比+5.47%と前月（同▲19.49%）から2ヶ月ぶりに拡大に転じたことが影響した。なお、自動車販売を除いたベースでも前月比+1.99%と前月（同+1.21%）から2ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向を強めるなど底堅さがうかがえる。宝飾品をはじめとする高額品に対する需要は引き続き堅調に推移しているほか、食料品やエネルギーなど生活必需品に対する需要に底打ち感がみられる上、日用品全般で需要が底入れするなど幅広い財で需要拡大の動きがみられる。足下ではインフレ圧力が徐々に高まる動きがみられるものの、世界経済の自律回復の動きを追い風に堅調な雇用・所得環境が続いており、家計部門の消費は下支えされている。

図2 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 SG 小売売上高の推移

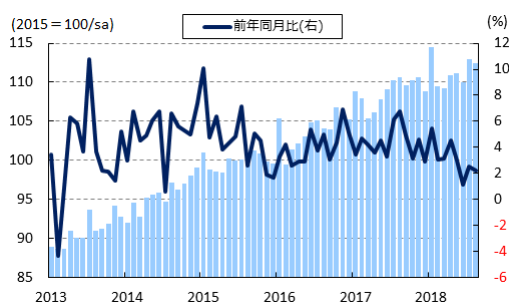


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [マレーシア]～鉱業部門で生産に底入れ感が出る一方、幅広く製造業の生産に頭打ちの兆候がうかがえる～

11日に発表された8月の鉱工業生産は前年同月比+2.2%となり、前月(同+2.6%)から伸びが鈍化した。前月比も▲0.44%と前月(同+2.64%)から2ヶ月ぶりに減少に転じており、中期的な基調は拡大傾向を維持するも、そのペースは鈍化するなど頭打ちの兆候がうかがえる。原油をはじめとする国際商品市況の底入れの動きなどを反映して、天然ガス関連を中心に鉱業部門の生産に底打ち感が強まる動きがみられる。一方、経済活動全般の動向を示す発電量の伸びに頭打ち感が鮮明になっているほか、製造業の生産の動きにも下押し圧力が掛かっている。うち、自動車をはじめとする輸送用機器関連の生産は比較的堅調に推移しているほか、木製品関連の生産にも底堅さがみられる一方、主力の輸出財である電子部品をはじめとする電気機器関連の生産で鈍化傾向が鮮明になっている。また、化学関連を中心とする素材・部材関連の生産も弱含んでいるほか、衣料品や食品関連の生産も鈍化傾向を強めるなど、幅広い分野で生産に下押し圧力が掛かっている。

図4 MY 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

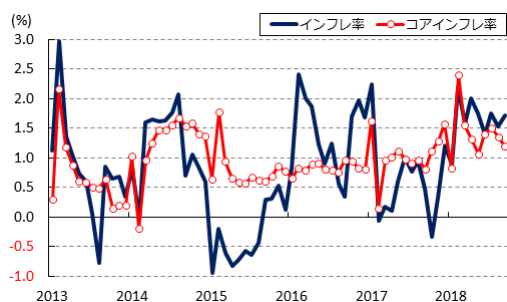
### [台湾]～インフレ圧力は高まりにくい状況が続くが、頭打ちしてきた輸出に底打ち感が出るなど改善の兆し～

5日に発表された9月の消費者物価は前年同月比+1.72%となり、前月(同+1.54%)から伸びが加速した。前月比も+0.17%と前月(同▲0.07%)から2ヶ月ぶりに上昇に転じており、原油相場の底入れなどを反映してエネルギー価格の上昇圧力がくすぶっている上、生鮮品を中心に食料品価格も上昇傾向を強めるなど、生活必需品で物価上昇圧力が強まったことが影響している。なお、生鮮食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+1.20%と前月(同+1.36%)から伸びが鈍化しており、前月比も▲0.22%と前月(同▲0.27%)から2ヶ月連続で下落するなど、物価上昇圧力は後退している。

エネルギー価格の上昇にも拘らず輸送コストが比較的落ち着いていることを受け、幅広く財価格が安定していることに加え、米中貿易摩擦の激化などに伴う景気の先行き不透明感により、堅調な雇用・所得環境にも拘らずサービス物価も下落するなど、全般的に物価上昇圧力が高まりにくい状況にある。

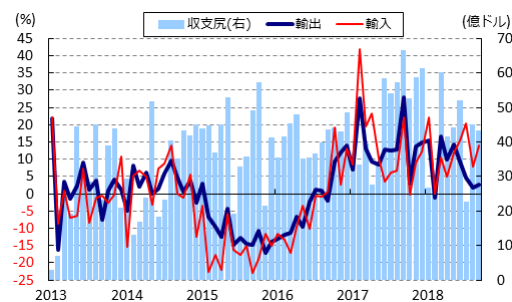
8日に発表された9月の輸出額は前年同月比+2.6%となり、前月（同+1.9%）から伸びが加速した。前月比も+7.9%と前月（同+0.1%）から2ヶ月連続で拡大している上、中期的な基調も徐々に拡大傾向に転じるなど、ここ数ヶ月は頭打ちの兆しがみられた展開は一変している。主力の輸出財である電子部品をはじめとする電気機械関連の輸出額に底入れの動きが出ているほか、金属製品や化学製品といった素材・部材関連の輸出額も底打ちするなど、幅広い分野で改善の動きがみられる。国・地域別では、中国本土向けやASEANなどアジア新興国向けのみならず、米国や日本、EUなど先進国向けにも堅調さがうかがえる。一方の輸入額は前年同月比+13.9%となり、前月（同+7.9%）から伸びが加速した。前月比も+10.2%と前月（同▲4.6%）から2ヶ月ぶりに拡大に転じている上、中期的な基調も拡大傾向が広がるなど強含んでいる。輸出に底入れの動きが出ていることを反映して、資本財のほか、素材・部材などの中間財に対する需要が押し上げられたことも影響している。結果、貿易収支は+43.33億ドルと前月（+45.25億ドル）から黒字幅が縮小している。

図5 TW インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図6 TW 貿易動向の推移



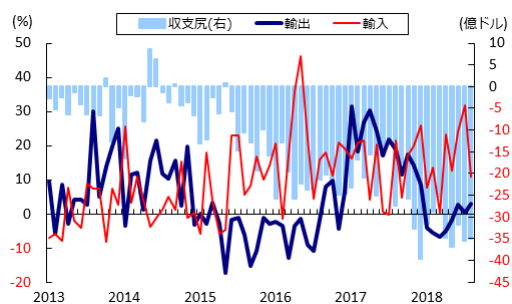
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [フィリピン]～世界経済の自律回復を背景に輸出は堅調維持の一方、輸入には頭打ちの兆候が出ている～

10日に発表された8月の輸出額は前年同月比+3.1%となり、前月（同+0.3%）から伸びが加速した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も3ヶ月連続で拡大している上、中期的な基調も拡大傾向を強めており、年明け以降頭打ちの兆しがうかがわれた輸出に底入れ感が出ている。主力の輸出財である電子部品関連の輸出が底堅く推移しているほか、この動きに呼応する形で機械製品関連の輸出にも押し上げ圧力が掛かっている。また、国際商品市況の堅調さを反映して鉱物資源関連の輸出額が押し上げられたほか、農産品関連の輸出額も拡大傾向を強めるなど、幅広い分野で堅調を維持している。国・地域別では、米国向けに頭打ち感が出ているものの、中国向けやASEAN周辺国などアジア新興国向けは引き続き堅調に推移しているほか、日本やEU向けの底堅さが全体の押し上げに繋がっている。一方の輸入額は前年同月比+11.0%となり、前月（同+31.6%）から伸びが鈍化した。前月比も2ヶ月ぶりに減少に転じており、中期的な基調も拡大傾向が鈍化するなど輸出とは対照的に頭打ちの兆しが出ている。家計消費など内需の旺盛さを反映して消費財関連の輸入は比較的堅調に推移しているほか、資本財関連の輸入も底堅い一方、中間財や半製品関連の輸入に下押し圧力が掛かり、全体の足を引っ張って

いる。結果、貿易収支は▲35.15億ドルと前月（▲35.46億ドル）からわずかに赤字幅が縮小した。

図7 PH 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。